

ドメイン I . 内部監査部門の管理

- ① 内部監査人はAICPA(米国公認会計士協会)が公表している監査リスク・モデルをアシュアランス業務に利用できる。
この監査リスク・モデルで監査リスクを構成する3つのリスクでないものは次のどれか。
- a. ビジネス・リスク
 - b. 固有リスク
 - c. コントロール・リスク
 - d. 発見リスク
- ② 業績(内部監査の有効性と効率性)の測定・評価・報告に関する説明で適切でないものは次のどれか。
- a. 業績測定・評価に関する関係者への報告の頻度は、4半期ごとに実施すべきである。
 - b. 内部監査部門は監査の有効性に関して主要な利害関係者からフィードバックを受け、必要に応じて改善を行うことが重要である。
 - c. 内部監査活動が目標、ベストプラクティス、基準に合致しているかを判断するために、内部監査部門の業績測定基準が策定されるべきである。
 - d. 業績の測定・評価を実施するためには、組織に価値を提供・付加する活動を識別し、主要業績指標を決定する必要がある。

ドメイン II . 個々の業務に対する計画の策定

- ③ 特定の施設・設備が存在するかどうかを確かめる監査手続として最も有効と考えられるのは、次のどれか。
- a. インタビュー
 - b. 分析的手続
 - c. 通査(スキヤンニング)
 - d. 観察
- ④ 現金預金の監査に関して、監査目標を表現しているものは次のどれか。
- a. 帳簿と現金の残高照合を行う
 - b. 帳簿記入に漏れがないか通査する
 - c. 現金預金が適切に保全されているかどうかを評価する
 - d. 現金の実査を行う

ドメインⅢ. 個々の業務の実施

- ⑤ 事前調査におけるインタビューの目的には該当しないものは、次のどれか。
- a. インタビュー相手を理解する
 - b. コントロール手段の妥当性と有効性を評価する
 - c. 全般的な情報を入手する
 - d. 今後のインタビュー戦略を計画するための基礎とする
- ⑥ ビジネス・プロセス分析の手法の一つにワークフロー分析がある。ワークフロー分析は、業務の流れを一定のルールの下に図式化して分析する手法である。この流れの中で、円滑な進行を阻害する要因(隘路)を【 A 】といい、成果を【 B 】と呼ぶ。A, Bに入る適切な言葉は、次のどれか。
- a. A=リスク B=パフォーマンス
 - b. A=インシデント B=ゲイン
 - c. A=ボトルネック B=スループット
 - d. A=バリア B=エフェクト

ドメインⅣ. 個々の業務の結果の伝達および進捗状況のモニタリング

- ⑦ 監査報告書の品質として7つの要件が求められる。7つの要件に含まれているのは、次のどれか。
- a. 正確・客観的・建設的
 - b. 正確・詳細・適時
 - c. 明確・信頼性・完全
 - d. 簡潔・準拠性・分析的
- ⑧ 監査終了会議(例:エグジット・ミーティング、クロージングミーティング)の目的に含まれるものは、次のどれか。
- a. 監査対象部門に是正処置を指示する。
 - b. 当該監査業務を担当した内部監査人の業績について、レビューする。
 - c. 最終監査報告書を経営管理者に提示する。
 - d. 監査対象部門の意見に基づき、監査報告の適切性のレビュー・検証を行う。